

(研究報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	小規模多機能施設を利用した看取り ～2025 年問題を乗り越えるために～
演者名	佐藤将之、沖田将人、日下部明彦、秋葉涼子、佐藤順子、宮越栄子
所属	みらい在宅クリニック

研究方法 (右から番号を選び NO. 欄に番号をご記入ください)	1. 症例報告 2. 症例シリーズ報告 3. コホート研究 4. 症例対照研究 5. 調査研究 6. 介入研究 7. 二次研究 8. 質的研究 9. その他研究	NO.
		5
背景：看取りや療養場所を病院から在宅へと移行する政策を政府は打ち出している。しかし、老老介護や独居は増加し、介護困難のために在宅療養を続けることが難しい家庭が多い。特に医療処置を必要としない終末期患者が入院を希望しても介護、看取り目的のみで病院に入院することはさらに難しい。我々は機能強化型在宅支援診療所であり 1 年間で 233 症例を自宅や施設で看取っている(平成 25 年 7 月～平成 26 年 6 月)。同法人には小規模多機能施設があり、当院の担当患者が希望した時に利用していただいていた。上記のような病院に入院を要する医療処置はないが、独居や介護困難などのために自宅療養が困難となった患者にも利用していただく事を施設運営の目的の一つとしている。 目的：当法人の小規模多機能施設を必要とした患者背景について調査し、小規模多機能施設の意義について考察する事。 方法：平成 25 年 4 月から平成 26 年 9 月末までの間に当小規模多機能施設を必要とした患者を対象とした。特に施設で看取った症例については、患者背景、医療処置、入所理由、期間などについても後ろ向きに調査した。 結果：期間中に当施設を利用した患者は全 44 名(現在も 7 名は継続通所中)。44 名のうち 28 名を当施設内で看取った。看取り症例の内訳は男性 14 名、女性 14 名、年齢中央値 79.5 歳。癌患者が 17 名、非癌患者が 11 名。医療処置としては注射以外のオピオイドが 12 例、IVH を含む輸液が 8 例、在宅酸素 7 例、尿カテーテル 5 例、モルヒネ持続皮下注射が 1 例であった。独居は 2 例で、他の症例は介護者と同居していたが、ほぼ全例で家族の介護困難の申し出が入所理由であった。 考察：当法人の小規模多機能施設を利用した患者背景について調査した。自宅での介護困難を訴える終末期患者を小規模多機能施設で看取することは十分に可能であった。2025 年問題を乗り越える対策の一つとして小規模多機能施設を利用した看取りは有用であると考える。		